

ACT!



MEDECINS SANS FRONTIERES
国境なき医師団



1999年
ノーベル平和賞受賞

支援者さまと国境なき医師団(MSF)をつなぐニュースレター



2023年8月号

看護師

© Oliver Barth/MSF



健康教育担当

© Elisa Fourt/MSF



© Kit Chan

医師



地域保健推進員



© Hannah Reyes Morales

助産師

© Peter Bräunig



現地スタッフって どんなひとたち?

薬局管理担当



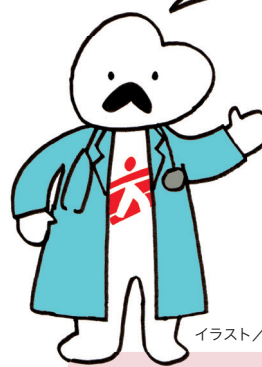
© MSF/Pacom Bagula



国境なき医師団(MSF)では、海外派遣スタッフのほかに、活動地で生まれ育った現地スタッフが働いています。約4万人に上る全スタッフの8割以上を占める、MSFの中心的存在。自国の医療を支えようと

実はスタッフの8割! MSFの中心的存在

今号は
特別編!



ドクターしんぞーが
特別編を案内するよ。
ご家族と一緒にぜひ
読んでみてね。

イラスト/木下綾乃

MSFの活動を子どもたちにもわかりやすく伝えるガイド役。名前の通り、人びとの大切な「いのち」をイメージした心臓がモチーフ。

する医師や看護師のほか、運転手や警備員などさまざまな役割を担っています。今号は特別編として、現地スタッフを詳しく紹介します。

カウンセラー

© Minzayar Oo



通訳

© MSF/Nadiia Voloboeva



© Sam Taylor/MSF



大工



© Pierre Fromentin/MSF

運転手



警備員

© MSF/Florence Dozol



通訳

© Tadeu Andre/MSF



衛生管理担当

© Peter Bauza



おはなし

1

避難生活をしながら勉強を続け、 妊婦さんたちを守る助産師に

マティアン(助産師)



© MSF

私は、MSFが支援する南スーダン北部のアウェイル州立病院の産科病棟で、助産師長として働いています。妻と娘、私の妹・弟と暮らしています。南スーダンの独立前、スーダンのハルトゥームという場所で生まれた私は、激化する紛争から逃れるため、親と離れて隣国のウガンダ

の難民キャンプで12年間暮らしました。英語を学び始めたのもこの頃。中等教育まで受け、独立後の南スーダンに帰国してからも科学系の勉強を続けていました。自力で大学に入ることは知識や金銭面でかないませんでした。2012年、UNFPA（国連人口基金）の奨学金コースに合格することがで



© MSF

産科病棟のチームメンバーと働くマティアン(左)。



知識 ①

患者さんと同じ言葉話す 海外派遣スタッフとの“懸け橋”的存在

患者さんと、海外から派遣されるスタッフとの“懸け橋”となって働く現地スタッフは一体どんな仕事をしているのか、紹介していくよ。医師や看護師、助産師などの医療系の仕事以外に、海外派遣スタッフが寝泊まりする宿舎の炊き出しや清掃担当、運転手、警備員や通訳など、彼らが担う仕事は実にさまざま。現地の言葉・文化や紛争状況に詳しいからこそできる仕事がたくさんあるんだ。

- 運転手
- 宿舎の炊き出し
- 宿舎の清掃担当
- 病院や宿舎の警備員
- 通訳

医療系以外にこんな職種もあるんだよ



マティアンが暮らす 南スーダンってどんな国？

2011年にアフリカ・スーダンから独立した世界一新しい国。MSFは2013年からの紛争で各地に避難する人びとなどに医療を届けている。人口・国土●約1100万人・64万km²※
宗教●キリスト教、イスラム教など※
言語●英語、アラビア語など※
主要産業●原油、農業、林業など※

※出典：外務省



おはなし

2

MSFで働くことは 患者さんの命も、家族の生活も救うこと

ザイナブ(健康教育担当)



© Maya Abu Ata/MSF

イエメンのタイズで、妊婦さんや新米のお母さんたちに病気やその予防方法、手洗いなどの大切さについてわかりやすく伝える、健康教育の仕事をしています。

2015年に内戦が始まるまでは、私の住む町での生活は安定していました。しかし、戦争のために経済状況が悪化し、働いても給料が支払われないなど、生活が苦しくなる人が激増。私たちも例外ではありませんでした。また、実家の近くで衝突が起これば、家族が巻き込まれたのではないかと常に緊張する毎日。食料が出回らず、栄養失調になる子どもや満足に食事がとれない人、家族が戦争の犠牲になり、心に傷を負った人が町にあふれ、MSFの医療援助が国内各地で求められている状況です。

親を失い、一家の稼ぎ頭に

きょうだいの中で年長の私は、



© Nuha Haider/MSF



イラストを使って、妊婦さんや新米お母さんに栄養の大切さや、感染症予防などの大切さを伝える。

© Nuha Haider/MSF

学業を終えて仕事を必死に探す中、MSFの求人募集を知り、すぐに応募。テレビでも見た憧れのMSFの一員になった時は本当に誇らしく、人生で忘れられない瞬間でした。

5年前、母の死後、稼ぎ手だった父が交通事故で亡くなりました。父の死を受け止められず心の動揺が続きましたが、同僚たちが励ま

してくれたおかげで、いまはきょうだい全員を引き取り、面倒をしています。まだ学生のきょうだいたちの、大学進学を夢を後押しできているのは、MSFの仕事があるからこそ。この国には、私のように病院で働くことで大勢の家族の暮らしや教育を支えている現地スタッフがたくさんいます。



知識 ②

MSFで得たお金を親族にも 現地の人びとの暮らしの支えに

MSFの活動地では、紛争などで収入を得られる稼ぎ手が少ない。そのため、現地スタッフが休暇などで故郷に帰る時には、仕事で得たお金をたくさん持ち帰り、家族や親戚に渡す人もいます。親戚思いの彼らが

仕事に戻って来た時、財布はすっからかん！ 内戦などで失業者が多いイエメンのような国では、MSFの活動が現地の人びとの生活をたくさん生み出し、厳しい暮らしをしている家族を助けている面もあるんだ。



知識 ③

技術を磨き昇進する人や 海外派遣を願い出る人も

厳しい環境の中でも、マティアンのようにスキルを磨いて仕事のレベルアップをするスタッフが aumentando。海外派遣スタッフにいろいろ教わったり、研修に挑戦したりする人も多いんだ。頼もしいことに、英語や専

門技術の勉強を重ね、自分の国を飛び出して活動する、海外派遣スタッフに名乗りを上げる人もいます。厳しい選考を通過して海外で働き始めた人が2021年には167人もいますよ。これからも応援していきたいね。



現地スタッフとの

あんなこと、こんなこと。

「あなたとの仕事で成長できた」 部下が伝えてくれたうれしい言葉

みやけ さちこ
——宮家佐知子(健康教育担当)

コンゴ民主共和国での私のチームの仕事は、健康を守るための知識を住民に伝えること。このとき部下のギュスターブが、MSFや地域で働く大勢のスタッフをまとめる役に挑戦してくれました。簡単ではありませんが、前向きに取り組み、「この仕事で、自分に足りない知識を身につけることができた。サチコ、ありがとう」という言葉まで掛けてくれました。成長を望む彼の想いに応えることができ、私もうれしく感じました。



宮家(右端)、ギュスターブ(右から4人目)と健康教育チームのメンバー。

内戦下の活動を支えてくれたのは 宿舎スタッフの温かいもてなし

くらの だんちえ
——倉之段千恵(手術室看護師)

2019年、2020年にイエメンの宿舎で私を迎えてくれたのは、コックのタビットと清掃担当のアミーナ。毎日のおいしいごはんや、きれいに清掃された部屋で眠れたことで、活力が湧きました。実は食事は、心の健康を保つだけでなくイエメンの食文化を知る上でも大切で、おかげで患者さんとの会話もはずみました。内戦下で気の抜けない毎日でしたが、最後まで走り抜くことができたのは、二人の温かい歓迎とサポートのおかげです。本当にありがとう！



◀腕をふるって、さまざまな国出身のスタッフに合うごはんを作ってくれたタビット(右)。

苦労を共にした相棒から 教わった、本当の「幸せ」

しのむらひであき
——篠村英明(薬剤師)

初めてMSFに参加し、派遣された南スーダンで出会ったのは、同じくMSFで働き始めたばかりのジョセフ。「MSF初心者」の二人で力を合わせて苦労を乗り越えるうちに、自然と絆が深まりました。日本に帰国する前日は二人で「幸せ」について語り合いました。紛争で恋人と離れ離れになり、連絡が取れなくなったというジョセフから教わったのは、「家族や友人など身近な人から大切に」。僕の人生の指針です。



「最高の相棒」のジョセフと篠村。一緒にMSFの活動で使う医薬品の管理を担当した。



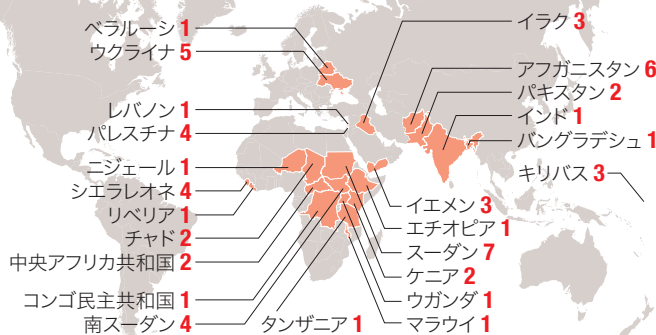
今号の感想を 教えてください

私しんぞーがご案内した今号の内容はいかがでしたか？
ぜひアンケートで皆さまの感想を聞かせてください。
締め切りは2023年9月29日(金)です。



スマートフォンから

日本からのスタッフ派遣状況 24の国と地域58人(2023年6月13日現在)



MSF連絡帳

20年ぶりに札幌でのイベントを開催！ エンドレスジャーニー展・札幌

昨年から全国行脚中の、世界の難民・移民の現状を伝える企画展。8月30日(水)～9月3日(日)は、札幌市で開催します！
テント式病院や援助活動を支える四輪駆動車、現地のトイレも再現。札幌の皆さまにお会いできることを楽しみにしています。

スマートフォンから



全国各地で街頭キャンペーン実施中！

関東、関西、九州の街頭や商業施設などで、支援の輪を広げる街頭キャンペーンを実施しています。皆さまの温かい応援がスタッフの励みになっています。



© MSF

ニュース
レター **ACT!** 2023年
8月号

発行元 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町 1-1 FORECAST早稲田FIRST 3階

寄付・ご登録情報に関するお問い合わせ

TEL **0120-999-199** 通話料無料

平日9:00～18:00 / 土日祝日、年末年始休業

※ご住所など、ご登録の情報についての変更や、「毎月の寄付」の変更は
上記までご連絡いただくか、マイページでお手続きください。



※2023年6月の情報を基にしています。

最新の情報は国境なき医師団ウェブサイトをご覧ください。

マイページ参照は
スマートフォンから

遺贈に関するご相談・お問い合わせ

TEL **03-5286-6430**

担当者
直通

平日10:00～17:00 / 担当：荻野、今尾

スマートフォンから



新・遺贈コラム
スタート！

国境なき医師団ウェブサイト www.msf.or.jp

